

## 初めて踏破した百名山

宇敷 辰男

最北端の日本百名山が利尻山（標高一七一九<sup>㌢</sup>）である。大学二年の夏休みに高校時代の友人と二人で、稚内から船で利尻島へ渡った。宿泊したユースホステルで利尻富士のご来光を観る夜間登山の希望者を募っていた。体を動かすのが苦手で山など高尾山位しか登っていなかった。しかし宿主から、前日登った人達はこの夏一番の素晴らしい日の出を拝んだ話を聞き、友人と参加することにした。

当時、深田久弥の日本百名山を知らず、何の装備もなく、懐中電灯をその場で購入し、恐らく運動靴で登山したと思う。あの時どんな道を上っていったのだろう。ネット検索してみたら登り六時間で同じコースが載っていた。

朝五時前の日の出に間に合うよう宿を出発。初心者向けで最初はなだらかな傾斜である。道幅も広くエゾマツやトドマツの森を歩いて、六合目の見晴台から礼文島が望める筈、でも深夜では何も見えない。徐々にきつい斜面になり、七合目付近から七曲ななまがりといわれる登山道が続く。ジグザグのルートを歩く前の人の足元を懐中電灯で照らしながら登っていくと、心臓破りの難所の先の八合目で、展望が開ける筈、でも暗く見えぬ。九合目から頂上まで道幅が狭く正念場。そして遂に利尻富士の山頂に到着し、見事な三六〇度の眺望が広がる筈であった。

しかし夜の明けた山は霧雲の中。ご来光を拝むことも、利尻島全体の姿や、広がる北の海も礼文島の姿も見ることが出来なかった。山頂で友人とカップ酒をとり出し乾杯した。

富士山を登ったことはないけれど、海岸線から山頂まで標高差一七〇〇<sup>㌢</sup>を踏破したのは、あの時だけである。

それから三〇年後、妻と上高地の澄んだ豊かな水の流れと穂高連峰を眺望する景色を体感し、山歩きが好きになった。

溪流のせせらぎ、木漏れ日、風の流れ、可憐な高山植物、季節の樹木を楽しみ、山頂を指さない山歩きが好きになったのは、あの夏一番のご来光が見えなかった利尻富士登山のお陰かも知れない。